

令和 3 年 6 月 16 日現在

機関番号：25403

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13291

研究課題名(和文) 伝統をめぐるマサイの「ポジショニングス」の多様性と可能性

研究課題名(英文) Diversity and possibilities of Maasai's "positionings" regarding tradition

研究代表者

目黒 紀夫 (MEGURO, Toshio)

広島市立大学・国際学部・准教授

研究者番号：90735656

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：マサイはアフリカに暮らす民族のなかでも世界的に広く知られる民族だが、今なお伝統に強くこだわる人びとというイメージが根強い。実際には、マサイの人びとは西洋的・近代的な開発も積極的に受容している。その一方で、外部者が抱くイメージを理解し、それに沿った言動を取ることで開発援助を始めとする恩恵に預かろうとしてもいる。本研究ではそうしたマサイの人たちの振る舞い、すなわち「ポジショニングス」について、マサイ・オリンピックというスポーツ・イベントを事例として調査した。その結果、マサイの人たちの「ポジショニングス」の実践は多様性を増しているが、便益の獲得には必ずしもつながっていない事実を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究はマサイを事例として、アフリカの少数民族が自分たちが今日の世界で外部者にどのように見られ、イメージされているのかという事実を理解しているだけでなく、それを活用して自らの生活や社会をよりよいものにしようとする行動している事実と、そうした行動がグローバルな情報や資本の流れの中で意図したような結果につながらない事実とを明らかにしている。これはつまり、アフリカ社会はグローバルな変化の中で能動的に行動する潜在力を秘めてはいるものの、グローバルな仕組みに従属せざるを得ない側面も大きいことを示している。

研究成果の概要(英文)：The Maasai are one of the most globally known ethnic groups in Africa, but their image is still being a people strongly attached to their tradition, not accepting modern development. In reality, the Maasai people are actively adopting themselves to Western and modern development. On the other hand, they understand the image of Maasai that outsiders have of them and try to benefit from development assistance by saying and doing things in accordance with that image. In this study, I investigated such behavior, or "positions," of the Maasai people in southern Kenya using the sport event of the Maasai Olympics as a case study. Consequently, it was revealed that the practice of "positioning" by Maasai people has been increasing in diversity, but it has not necessarily led to the acquisition of benefits as they expect.

研究分野：アフリカ地域研究、環境社会学、開発社会学

キーワード：マサイ 表象 伝統 ポジショニング マサイ・オリンピック ケニア

1. 研究開始当初の背景

マサイは東アフリカの乾燥・半乾燥地域に暮らす牧畜民であり、今日まで「伝統的」なアフリカを象徴する民族と見なされ、「アフリカ＝マサイ＝伝統」というイメージはグローバルに共有されてきた。

そうしたマサイに関して注目されるようになってきているテーマとして、グローバルなレベルにおける戦略的で積極的な伝統の表象というものがある。1970年代の時点でマサイは、白人観光客を喜ばせるために偽りの伝統を表象および実践していた。当時において、それはあくまで観光の場に限られる実践であった。その後、国際的な先住民の権利運動に携わるマサイの女性が、グローバルな注目と支援を集めるため、その時々状況に応じて臨機応変にマサイの表象を変化させていることが研究によって明らかになった。そして、表象を戦略的に操作するその行為は「ポジショニングス (positionings)」という言葉で表現された。ここにおいて、マサイの人々はグローバルなネットワークに接続するようになっただけでなく、グローバルに「正しい」とされる言説の内容を理解し、その言説に沿った偽りの「マサイの正しい伝統」をグローバルなメディアをつうじて積極的に発信することで、自分たちが置かれている苦境を克服しようとするようにならなっていることが示された。

このようにマサイが「ポジショニングス」を実践している事実が明らかとなったわけだが、先行研究の分析対象は限定的であった。すなわち、そこで対象となっているのは、国際会議にマサイを代表して出席し、マサイのイメージについて民族の代表者として発言をすることができる知的・政治的なエリート層である。それに対して申請者は、ナショナル・グローバルな主体によって野生動物保全の取り組みが進められているケニア南部のマサイ社会を事例として、教育歴も高くなく国際的な経験もネットワークも持たないようなマサイの人びとであっても、「ポジショニングス」と呼び得る実践をしていることを明らかにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、アフリカを象徴する民族として国際的な開発援助の対象となるだけでなくグローバルにイメージが流通しているマサイを事例として、いかにアフリカの人や社会が様々な形で「ポジショニングス」を実践し、自らの生活や社会をよりよいものにしようとする能動的に行動しているかを明らかにするとともに、そうした試みが今日の世界にあってどのような結果を生み出しているのかを検討することで、アフリカ社会の潜在力を再考することである。

3. 研究の方法

本研究では「ポジショニングス」を分析する事例として、環境 NGO が開催をしているスポーツ・イベントであるマサイ・オリンピックを主には取り上げる。このイベントに関連して、主催者である NGO がインターネットを通じて、ならびにイベントの現場においてどのようにマサイを対外的に表象しているのかをフィールドワークに基づき明らかにする。また、マサイの人びとがマサイ・オリンピックに関連して、自分たちマサイをどのような存在として対外的に説明し、「マサイの正しい伝統」というものをどのように説明しているのか、イベントを主催する環境 NGO によるマサイの表象についてどのような考えを持っているのかという点についても、フィールドワークによってマサイの人びとの考えに迫るとともに、マサイ・オリンピックの当日の様子を観察し、また、マサイ・オリンピックに参加してきたマサイの青年たちを対象としてインタビューを行なうことを通じて明らかにする。そうして得られた情報に基づき、マサイの人びとがどのような「ポジショニングス」を行なっているのか、また「ポジショニングス」によって何を目標としているのかを把握し、先行研究との比較も交えて分析するとともに、その結果としてマサイの人びとが期待しているような成果が上がっているのかも検討する。

4. 研究成果

マサイ・オリンピック (the Maasai Olympics) とは、ケニア南部アンボセリ (Amboseli) 地域で活動する環境 NGO 「ビッグ・ライフ・ファウンデーション (Big Life Foundation : BLF)」が、「スポーツを通じた保全 (conservation through sport)」として 2012 年から隔年で開催している陸上競技大会である (2020 年に予定されていた第 5 回大会は新型コロナウイルス感染症のため 2021 年に延期)。アンボセリ地域はアフリカを代表する野生動物観光の目的地であり、また半遊動的な牧畜を主な生業としてきたマサイが、数百年にわたり野生動物と共存をしてきた場所である。

ある。

マサイ社会にはライオン狩りの文化がある。伝統的にライオン狩りは、成人儀礼を経験した青年階梯の人びとが集団で行なう行為であり、ライオンに一番槍を刺すことで終生まで誇ることができる名誉を獲得することができた。一方、ライオンは絶滅が危惧される種の一つであり、グローバルな野生動物保全の運動の中で大きな関心と支援を集める存在でもある。BLF はライオンの絶滅を防ぐためにマサイ社会からライオン狩りを廃絶することが必要であると主張し、そのために青年たちが互いに競い合いながら集団で行なってきたライオン狩りに代わる競争と名誉獲得の機会として、マサイ・オリンピックを開催している。

マサイ・オリンピックはアンボセリ地域のマサイの青年たちを対象とし、BLF は彼らを「戦士 (warriors)」と呼ぶ。そして、アンボセリ地域に伝統的に4つの「戦士集落」が設けられてきた時、BLF はマサイ・オリンピックをそれら4つの集落の間の対抗戦の形で開催してきた。こうした点に基づいてか、BLF はマサイ・オリンピックを「伝統的な戦士の技能に基づくマサイの組織的なスポーツ競技会」とであると説明してきた。マサイ・オリンピックには短距離走、長距離走、槍投げ、棍棒投げ、高跳びの5種目があり、各種目の成績上位者と全種目を通じて最も優れた成績を収めた集落には賞品・賞金が与えられる。当日は地域内外から訪れた多数の観客とともに盛り上がり、「戦士」たちも大会の継続と参加を熱望する。その様子はBLF が作成した公式ウェブ・サイトに加え、欧米だけでなく中東やアジアを拠点とする数多くの国際メディアによって報じられてきた。そして回を重ねる中では大口のスポンサーも賞金の総額も増えている。

BLF がマサイ社会との一体性を強調するのに対し、「戦士」たちはマサイ・オリンピックをBLF が「ホスト」として主催するイベントと捉え、自分たちはそれに「ゲスト」として参加しているにすぎないと考える。すなわち、BLF はインターネット上にマサイ・オリンピックの公式ウェブ・サイトを作成しているが、そこにおいてだけでなく大会の中で主催者として挨拶をする際にも、マサイ・オリンピックがマサイ社会からの発案であり、マサイの人たち自身がライオンを保全するためにライオン狩りを止めることを決意したのであって、BLF はそうした地域からの要望に応じているだけだと説明する。しかしその一方で、BLF は地域コミュニティとの間に保全の便益の分配をめぐる軋轢を抱えており、2018年には「戦士集落」の一つの参加が不可能となった。この時、BLF は伝統的な「戦士集落」とは無関係なチームを急造し、それを参加させることで4チームの対抗戦という大会のフォーマットを維持した。これはマサイの伝統に根差さないが、そうした事情を対外的には一切説明をしなかった。また、会場のレイアウトもBLF が招待をした部外者の鑑賞のしやすさを有するように変更されており、その結果、地元のマサイの人たちは競技の様子を見ることができなくなり、以前のように選手と一緒に盛りに上がることができなくなってもいた。このようにBLF は、マサイ・オリンピックがコミュニティ・ベースであることを事あるごとに強調しているのだが、実態としては自分たちの都合のいいようにマサイの伝統を表彰していた。一方、マサイの人びとはBLF がマサイの伝統や現状にそぐわない選択をしても問題視しないていた。その理由としては、マサイ・オリンピックに自分たちがオーナーシップを持っているという意識が欠けている点が指摘できる。参加者は賞金の増加や発言の機会など要望はいくつも持っているが、マサイ・オリンピックはBLF のイベントだと考えているので、そうした期待が叶わなくともイベントそれ自体を開いてくれることについては肯定的に捉えていた。とはいえ、自分たちが享受できる便益が大きくなることを期待して、マサイの人びとはBLF やマサイ・オリンピックを支援するスポンサーに対しては、彼ら彼女らが期待する通りの言動を見せてもいる。しかし、それによって期待した通りに便益が増大してはならず、あくまでBLF を含めた部外者の満足度のみが高まる結果となっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 MEGURO, Toshio	4. 巻 40(2-3)
2. 論文標題 The Unchanged and Unrepresented Culture of Respect in Maasai Society	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 African Study Monographs	6. 最初と最後の頁 93-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/244852	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 MEGURO, Toshio	4. 巻 22
2. 論文標題 Gaps between the Innovativeness of the Maasai Olympics and the Positionings of Maasai Warriors	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Nilo-Ethiopian Studies	6. 最初と最後の頁 27-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 丸山淳子・目黒紀夫	4. 巻 92
2. 論文標題 アフリカにおける「住民参加型観光」の再検討 地域社会の視点から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アフリカ研究	6. 最初と最後の頁 19-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11619/africa.2017.92_19	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 目黒紀夫	4. 巻 92
2. 論文標題 「万能薬」ではなく「サプリ」として ケニア南部に暮らすマサイにとっての観光の意味	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アフリカ研究	6. 最初と最後の頁 83-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11619/africa.2017.92_83	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 目黒紀夫
2. 発表標題 スポーツを通じた保全は本物か？ マサイ・オリンピックをめぐる環境と文化のポリティクス
3. 学会等名 日本スポーツ人類学会第22回大会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 目黒紀夫
2. 発表標題 第4回マサイ・オリンピック：変わったものと変わらないもの
3. 学会等名 日本アフリカ学会第56回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 目黒紀夫
2. 発表標題 マサイ・オリンピックに関する環境社会学のフィールド調査
3. 学会等名 日本スポーツ人類学会2019年度第2回スポじんサロン
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MEGURO, Toshio
2. 発表標題 Sport for Development and Conservation? (Un)changing Modernity and Authenticity of Maasai Olympics
3. 学会等名 Kenya-Japan Collaboration Workshop on Sport Research
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 目黒紀夫
2. 発表標題 イベント化する野生動物保全における「スペクタクル」の表象：ケニア南部、マサイ・オリンピックの事例研究
3. 学会等名 第60回環境社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toshio MEGURO
2. 発表標題 Misrepresentation and Appropriation of Cultural “ Innovation ” by Neoliberal Conservation Alliance: The Case of the Maasai Olympics
3. 学会等名 International Symposium on African Potentials and the Future of Humanity
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MEGURO, Toshio
2. 発表標題 Gaps between the Innovativeness of the Maasai Olympics and the Positionings of Maasai Warriors
3. 学会等名 ECAS7 (the 7th European Conference on African Studies) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 目黒紀夫
2. 発表標題 民間組織による「コミュニティ保護区」設立の意図 ケニアの事例
3. 学会等名 「野生生物と社会」学会第23回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 目黒紀夫	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 400ページ(分担部分pp.263-281, pp.373-374)
3. 書名 遊牧の思想 人類学がみる激動のアフリカ(太田至・曾我亨編、「伝統の『便宜的』な使い方 『コミュニティ主体』の動物保護とマサイ」、「マサイ・オリンピック狂想曲」を分担執筆)	

1. 著者名 白石壮一郎、椎野若菜、目黒紀夫、村尾るみこ、清水貴夫、横田祥子、福島万紀、碓陽子、丸山淳子、白波瀬達也、川端浩平、安岡健一	4. 発行年 2017年
2. 出版社 古今書院	5. 総ページ数 216
3. 書名 FENICS100万人のフィールドワーカーシリーズ7 社会問題と出会う	

1. 著者名 島田周平、上田元、成澤徳子、水野一晴、遠藤聡子、池谷和信、寺谷亮司、佐川徹、松村圭一郎、佐藤廉也、藤岡悠一郎、丸山淳子、伊藤千尋、小川さやか、大門碧、遠藤貢、福西隆弘、西浦昭雄、吉田栄一、目黒紀夫、荒木美奈子、松本尚之	4. 発行年 2017年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 163
3. 書名 世界地誌シリーズ8 アフリカ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------